

122  
74

東 京 圖 書 館

和 書 門

小 說 類

三 六 函

七 八 架

七 五 冊

七 五 冊

繪本通俗三國志

五編

四



繪本通俗三國志五篇卷之四

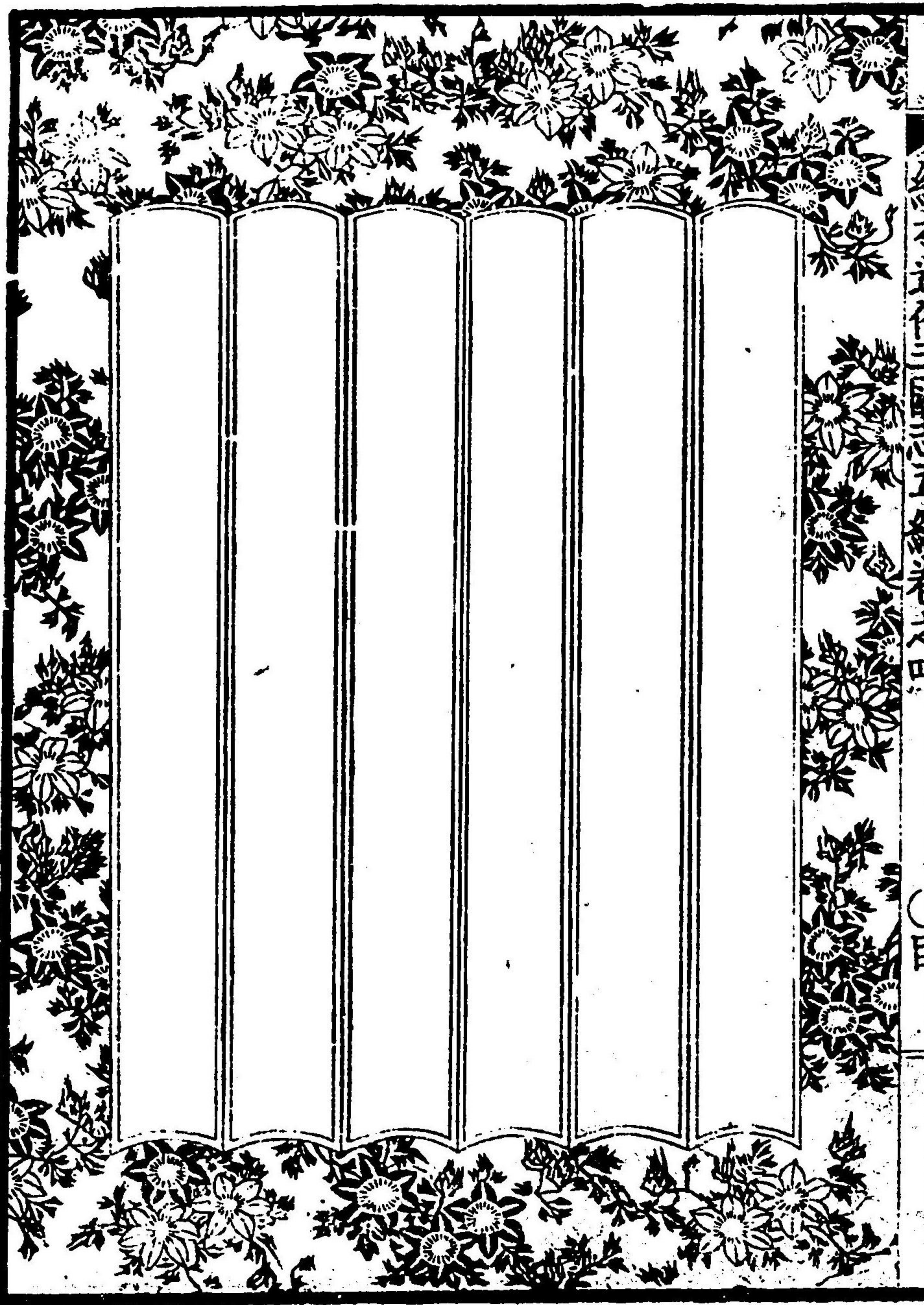
目錄 明治十年交換

甘寧百騎襲曹操

魏王宮左慈擲盆

曹操試神卜管輅

大似百騎



繪本通俗三國志五編卷之四

甘寧百騎襲曹操

吳主孫權すんけんのよき濡須ぬしよの口くちを守まもりて、兵へいを調とるも、早馬はやま来きり、曹そう操そう探たんしつらら四十万しじゅうまんの勢せいを率りつして、漢中かんちゅうより、さの石いしへ攻せ上あると告つげし、  
 いとぞ、諸大將しよたいしやうとあひあて、計けいを相議あひまし、まの董襲とうじやく、徐盛じよせい、大船おほいぶね五  
 十艘じゅうさうを列りねて、濡須ぬしよの口くちを守まもりし、東武とうぶに騎馬きばの勢せいを付つけ、  
 江辺えべに往來わうらいして、敵てきの来きると巡哨じゆんせうせしむ、張昭ちやうしやうが曰いく、今曹操こんそうそう  
 が大軍たいぐん、遠く来きる。一人ひとりよき大將たいしやうを命めいじて、まの銳氣えいけいを挫くが  
 し、まの孫權すんけん諸將しよしやうを問とひ曰いく、曹操そうそうさへ来きる。人馬にんばをさへ  
 遠路えんろを疲つかる。たまるまらねて討うつ。まの銳氣えいけいを挫くが、まの  
 凌統りやうとうとて出いで曰いく、某たれがさへ来きる。三千余騎さんぜんよきを率りつして、  
 凌統りやうとうとて出いで曰いく、某たれがさへ来きる。三千余騎さんぜんよきを率りつして、

らる甘寧が自ら其の初めたる。たゞ百余騎を率いて敵を破らん。凌統の内怒りて。とも争色見せしむ。孫權とあむら凌統に三千余騎を付て。先手と甘寧と第二の備と。濡須の口に出く。敵を伺ひしむ。凌統兵を引て出けしむ。向より馬烟をあげて。曹操が勢よせ来り。張遼真先とせん。凌統と五十余合戦ひ勝負せしむ。決せざりけしむ。孫權とあむ凌統が失あらん。とと拍を呂蒙に命とて。救ひ援けしむ。甘寧と生孫權に告て曰く。其の初めたる。たゞ百騎の兵とせん。今夜曹操が陣とあむ。若一人とせん。射とせん。大なる羞とせん。孫權の願に應じ百人の精兵とせん。酒五十樽羊の肉五十斤とせん。甘寧とあむ。受とせん。曹陣中を回り。百人の

兵を二列に坐せしむ。よの銀の碗とせん。酒を飲。人むむ。君の命と受。今夜汝ホとせん。酒を飲。あく力と益して。怒力とやとせん。百人の兵とせん。互ひを面とせん。甘寧とせん。甘寧。謀人の従ひとせん。大に怒り。手を劍と執て。大將軍の圍の大將軍とせん。汝命と惜しとせん。汝ホとせん。身を惜して大將の下知に従ひぬぞと色と変じて云けしむ。謀人とあむ。驚き坐して起て再拜して曰く。汝がせん。命と棄て。將軍に従はん。甘寧は喜び。酒肉とあむ。持成とせん。三更の比とせん。白き鷲の翎と人々の盔の真甲と抉とせん。印とせん。曹操が陣と破り。鹿垣と打破して。鑼と鳴し。鼓と打。城と

造りて入り直り中軍より打て入り元來曹操が本陣より馬  
 車仗をまき間もさく鉄桶のどくありしうたまひ城の言もさど  
 るいして上と下と騒動も甘寧性来鑼鼓を打鳴りてさうよ  
 させ散彼も集り縦横もさせ廻りけし曹操が勢もいいて騒  
 んで暗い暗い何とて敵の言もさ味方ともいひひり同士の  
 さうとお刺さるるまじくあつて陣も火の手もあびてその  
 光星のどく城の言もさういへる震ひけし甘寧南の門より赤  
 て生るるまじく鐵桶のどくありしうたまひ城の言もさ  
 鋒も當るともあつて百騎の兵一人薄手とて  
 も被りてまじくさういへる孫権又周泰と二手の勢も付半  
 途に生るるまじく鐵桶のどくありしうたまひ城の言もさ

敵の伏兵ありとて怖れ兵を制して追ひよる甘寧百騎も  
 て本陣より回りまも鼓を打笛を吹く方歳で唱へ敵のさ地  
 と動けし孫権もいへる生むる甘寧が手と執り日將  
 軍今夜の働き曹操が意と挫く足りまもいへる  
 が膽を觀んとてまじくさういへる  
 甘寧持てまじくさういへる受百人の士卒も分あつたけし孫権  
 おもひ甘寧と平虜將軍も封じし大將もいへる曹操手  
 下も張遼ありまも手下甘寧ありまも相敵するも是れり  
 ことまじくさういへる重く用ひまも次目張遼兵とまじくさういへる  
 凌統の内甘寧が功名せしと憎む孫権もいへる甘寧が  
 五千余騎とまじくさういへる敵を破らしとて孫権もいへる

會々三國志五編卷之四

田



甘寧の百の酒

雲



甘寧

諸

諸大将

諸大将

矢を打て打止甘寧を左に備へ凌統を右に備へ陣を張る  
ひまも張遼も真先馬を生し左に李典あり右に樂  
進あり吳の陣より凌統刀を提げ生けし魏の陣に樂進  
鎗を拵め生けし人あり五十余合あり勝負はわ  
りし曹操も生けし陣前生けし見物しけるが  
ひし曹休を呼ぶあま射取と云けし曹休ちうくと乘  
遼は後みとて敵を射る矢凌統が乗たる馬の脚  
を射洞し馬の尻風を射とて凌統地上に落たりし  
樂進鎗をぬき突んとて矢一ひ末に眉間の直中  
に射る急所の痛手あるを鎗を打堯馬よりさきはみ落し  
ると味方射を助けると両方の軍勢ひうと相救ひて

引退く凌統回つて孫權を見へけし孫權が曰く樂進を射  
て汝を救ひしもの甘寧あり凌統をれも甘寧をひいて頓  
首して受けぬと思ひし足下の浩る恩を施しぬ  
と甘寧が曰く主公の命をよみて敵の大將を射落し  
る將軍の爲に方分の二の報を凌統大に悦び足下昔我父  
を殺しぬる仇も今とも君の事とせんとす今日  
一命を助ぐる恩ありまふぞ曰き恨と存せんやと云われあり  
二人生死の交をむとびけし曹操へ樂進を扶けし本陣より  
り鎗を抜く治療を加へ諸軍に下知を傳ふ兵と五千あり  
ちし中軍を領し左の一路へ張遼右の一路へ徐晃を  
の二路へ李典右の二路へ龐徳とふ二万余騎を揃へ直に

頃とさして推寄る。吳の陣より董襲徐盛二人舟手り大  
將として兵船を浮く待りけり。魏の勢雲霞のごとく来る  
ぞえて。魏軍とふ拍る色あつけば徐盛怒りて曰く君乃  
祿を食く命と君を献る上にあんぞ敵と拍るぞあらんや  
とて馬より走り小舟を打のり飛ぶごとく岸よのらり馬に乗て  
叔百人を徒へ左右とりりまを真地暗に李典がひりこる。二万  
余騎が中へ射て入り四方八面と蒐破る。江よ泛んごる董襲  
が船を百艘一度に鼓を打噴を造りて徐盛が勢ひをたすけ  
けふが戦ふ大風よも起り白浪天と拍る舟をぐく覆へら  
んとしけり。吳の勢をふあてさき小舟を引とりて逃去も  
の叔をさるるも入ぐよ呼り舟を沈まんよ守將軍速るよ小

舟よのりて陸よ上り人よ云けよ董襲劍を抜て大に怒り大  
將とて君の命を受くぞよ坐く敵を拒ぐもんぞあて是と  
去く命と助るの理あるんや再びいよものへちちちと斬んとく  
忽ち十余人と斬死とさよども風よよく烈しくて江よ浮ん  
だる大船ども荒磯よあつて微塵よあり大浪よまうれて沈  
もありの卒よ一人も残らざ溺れ死し扶るものへちちちまを  
徐盛の李典が万余騎と黒烟を立ち戦ひけるがさよも列ま  
浦風よ沙を飛し石を走らしさく面とむくべきやうもあがり  
しよ吳の勢をふ馬武者よりけ立られ射るよの叔をさ  
も吳の大將陳武の濱の手の合戦よ魏の勢勝よのりて徐盛  
さくぐ成ぬときいてさくから救んとて来りけるが半途まで



徳が勢と土合ひ西軍入りとだま火をちりて攻戦し孫權へ初  
より濡須塢の中陣を取り味方の負色よりたるてまいて  
ぶつと兵とぞとせまきりけるが徐盛が李典を圍きたるて  
たまたま救へんとさるるあふ忽然としく張遼徐晃が二手乃  
勢前後より討て孫權を引色とぞ四方より攻たりける  
曹操は高き阜の上よりまこと望むたまたま呉の大將を討取  
て孫權を擒ませんといひまれば傍よりけり許褚力をま  
し馬を乗せと呉の勢の真中よりけり當と幸ふ切くまひりけ  
べ呉の勢その勇敵とさるるあつらけて二手に分ち又一所よ  
あひまきり得て魏の大軍まびりて圍むと喊の音大にひまけ  
呉の大將周泰大音あげ右てり次弟を力疲とて一人も扶

るものありて一方を打破の早く圍と出よとさまきりて鎗と  
拈ひて敵の大勢ひるところ中より浦へぬけ出と浪打  
交ふ馬ととち後と顧りたるま主人孫權が又圍と出る  
とあつと右てり吐れとと又取と回と大勢の中へけり味  
方の兵のあふと君の行衛やまかりたると問ふあつと馬相と立  
て戦ひるま君の定と圍とまらんとまもと周泰がまきりて  
直に馬と打とませ入り縦横よりけ通りと尋ぬまの案のどく  
孫權がぶつと兵と率ととまらんとまらんとまらんとまらんと  
音あげ某が跡と付と出ると呼りて真先とまらんとまらんと  
ま江の辺よりとけ出と後ととるま孫權又魏の勢を圍とま  
れを取と返してとまらんとまらんと周泰がまらんとまらんと

れを孫権そんけんすけるへ敵督てきとくと放はなつて矢やの来きる上うへ雨あめのどどととと  
 よゆで坐まるとめたるを周泰しゅうたいが曰いく君きみまゝらうべ前まへに進すすみ某たがひ後ごと推おし  
 ぐべーとと勇ゆうと振ふるひ力ちからを盛もとく敵てきとをらひその身みも朱あかよりで  
 血ちのあがる上うへ泉いづみのどく孫権そんけんと守護しゆごしてをらうく江えの辺へに生い  
 けと日ひ蒙もう一軍いっぐんを引ひく舟ふねより上あり追蒐おいうる敵てきと遮さりて孫権そんけんと  
 扶たすけく舟ふねのらうし孫権そんけんが曰いくいま周泰しゅうたいが三度さんどまでうけいひて  
 扶たすくるはあらうぞん我われいづら虎口こらうを逃のがれんとと得えん徐盛じよせい敵てきより  
 さまれて今いま坐まると克かつむといふとと救すくふ周泰しゅうたいが曰いく某たがひ二  
 度ふた行ゆく救すくひきたらんとして鎗やりを提ひげて敵てきの群むらりたる中なかに突つひて  
 うけ入り徐盛じよせいと救すくむととゆの罟あみと生うけあが二人ふたりとゆ深手ふかてねうね  
 被かり岸きし近くあつて追蒐おいうる敵てきと又また戦いくさひはと日ひ蒙もう一軍いっぐんを引ひく舟ふね

とかよせ射手しやてと揃そろくさんぐも射やませ敵てきと拂はらぐ卒つひも二人ふたりを  
 救すくひ回まる吳ごの大將たいしやう陳武ちんぶをとも魏ぎの大將たいしやう龐徳ぱうとくが二万ふた余よ騎きと  
 火ひと散ちくと揉も合あひあが續つく味あじがさくくとその勢せい残のこりて  
 れ山際やまぎはに逃のがれ入いりあつて龐徳ぱうとく勝かつたといふれ追おひとされかた  
 陳武ちんぶやもさむと取とり回まると戦いくさひけるが樹木じゆぼくの茂さかりたる  
 ころよとまきつと追付おいうけらるる引ひく回まると戦いくさはんともとて運命うんめい  
 の盡つみや鎧よろいの袖木そでぎの枝えだままごとく快かく働はたらき得えるが龐徳ぱうとくは  
 たり賢けんくと雑ざつ刀たうの柄えとつりの腰こしより二ふたの斬きり落おつて曹せう  
 操せうは孫権そんけんが逃のがれんととと馬うまと飛とりて江えの辺へに追おひ  
 ねらひの射手しやてと生うくと矢やと射やらひさせけと吳ごの船ふねも日ひ蒙もう一軍いっぐん  
 兵へいと下知げちくとさんぐも射やる吳ごの勢せいは今朝けさよりの軍ぐんも矢や種たね

周泰血戰と  
孫權と救入



周泰

孫權

魏之兵





く若りけしむ孫權大ニ称嘆し。倉の板に應じて。一斛の酒を賜ひけり。周泰を多ぶと酔く。恩と謝して退きけしむ。孫權青き羅の蓋をさして。その功と耀し。相親と骨髄をさぎたり。その餘の諸將を多ふ恩賞と賜りて。その濡須の要害を守り。西軍相拒ん。二月あまりの及びけしむ。張昭顧雍をけり。今曹操勢ひ大なり。力てやむて争ひがごとく。久く戦ふ多し。兵士と損を多し。不如和睦を求ぐ。民の苦と救ぐ。孫權を多し。従ひ歩隊を使として。曹操と和睦を求む。毎年貢物と献らんと願ひけしむ。曹操もきく。破りつたきとて。卒に許容し。孫權を多し。兵と多し。國を回し。我も都を回らんとぞ答ける。孫權を多し。よのく。蔣

欽周泰ととめて濡須の口と守らし。大軍を引く。その秣陵を回りけしむ。曹操も曹仁張遼と合肥の城を多し。置ぐ。都へぞ上りけしむ。

魏王宮左慈擲筭

建安二十一年。曹操合肥の城より都へ回りけしむ。諸人相親し。尊んで魏王とせん。侍中王祭詩を献りて。その徳を称しける。其詩曰く。

従軍有苦樂	但聞所從誰	所從神且武
安得久勞師	相國征關右	赫怒震天威
一舉滅獯虜	再舉服羗夷	西收辺地賊
忽若俯拾遺	陳賞越山岳	酒肉踰川城



事。世祖中貞而時有難易。是以曠年數百。無異姓緒。英王之位。朕以不德。繼序弘業。遭率土分崩。群兇縱毒。自西徂東。辛苦卑約。當此之時。惟恐溺入于難。以羞先帝之聖德。賴皇天之靈。俾君秉義。奮身震迅。神武捍朕於艱難。獲保宗廟。華夏之遺民。含氣之倫。莫不蒙焉。君勤道。禹稷忠。伊周而掩之。以護讓守之。以彌恭。是以往者。初開魏國。錫君土宇。懼君之違。命慮君之固。辭。故且懷志。屈意封君。為上公。欲以欽順。高義。須俟。勳績。韓遂。宋建。南結巴蜀。羣逆合從。凶危社稷。君復命將。龍

驥虎奮梟。其元首。屠其窟。柄暨至西。征陽平之役。親擐甲。曹深。入阻。儉。艾夷。發賊。殄其兇醜。蕩定西陲。懸旌。萬里。聲教。遠振。寧我區夏。蓋唐虞之盛。三后。樹功。文武之貞。且爽作輔。二祖。成業。英豪。佐命。夫以聖哲之君。事為已任。猶錫土。班瑞。以報功臣。豈有如朕。寡德。仗君以濟。而賞典不豐。將何以答。神祇。慰萬民哉。今進君為魏王。使使持節。行御史大夫。宗正。劉艾。奉策。壘玄土之禮。苴以白茅。金虎符。節第一至第五。竹使符。第一至十。君其正王位。以丞相。領冀。汝。牧。如故。其上。魏公。壘。綬。符。

册敬服朕命。竹簡血兩象。克綏庶績。以揚我祖之休命。勿復固辭。

曹操詔之拜見。假上書。固王位。辭。曹操詔之拜見。假上書。固王位。辭。又手。詔。下。其。詔。曰。曰。曰。

大聖以功德為高美。以忠和為典訓。故創業垂名。使百世可希。行道制義。使力行可效。是以勳烈無窮。休光茂著。稷契戴元首之聰明。周召因文武之智用。雖經營庶官。仰嘆俯思。其對。豈有若君者哉。朕惟古人之功。美之如彼。思君忠勤之績。茂之如此。是以每將鑠符折瑞。陳禮命册。寤寐寐慨。然自思守文之不德。

馬。今君重違朕命。固辭懇切。非所以稱朕心。而訓後世也。其抑志擗節。勿復固辭。

曹操之太子王位。受十二旒之冕。以金銀之車。之。天子之儀。用。出。警。入。躍。之。魏王宮。造。世子。立。議。元。太。妻。丁。夫人。卒。子。子。妾。之。腹。出。子。子。氏。初。曹。昂。生。城。之。軍。死。氏。四。人。之。男子。生。曹。曹。植。曹。無。子。人。丁。夫。人。之。子。下。氏。正。宮。定。三。子。曹。植。字。子。建。幼。少。子。極。聰明。筆。揮。能。文。章。作。曹。操。之。愛。世。嗣。子。曹。子。曹。之。企。之。也。



中安ろを。中太夫賈翽とて。ひそひそと問けり。賈翽耳と付く。私諾き君世と嗣の望あり。教ふまじ。かやうく。まの人の云けり。曹丕はもと喜ぶ。あつて。曹操の征伐を。出ると。謀の子弟とて。く出て城外を送る。曹子建の詩を作りて。功德と述。文を造りて。別と惜み。はまの左右の謀臣。その巧と称し。曹操も。その内。喜ぶ。只曹丕の別。臨んで。涙とあがり。拜送り。けり。左右の謀臣。たふ哀と催して。別と傷むの情と起せり。まよひ。曹操疑ひの。んと生。曹子建の詩。文の内。巧と銜ひ。文字の間。ま。んと托く。父を慕の誠。曹丕。及ぶ。と。おひけり。曹丕。又ひそひそ。金銀と。めて。父の傍。侍る。の。た。と。睡。び。懐。け。り。

く。み。已。が。徳。ある。由。と。云。せ。し。ら。曹。操。と。て。魏。王。の。位。を。升。り。世。子。と。立。ん。と。し。て。ん。と。ら。よ。一。決。せ。と。乃。ち。賈。翽。を。問。て。世。子。を。定。め。ん。と。も。の。も。何。ま。の。子。と。立。ま。さ。と。い。ひ。け。り。賈。翽。嘿。然。と。し。て。の。云。を。曹。操。の。も。人。と。問。ふ。賈。翽。曰。く。其。の。深。く。ん。存。ま。る。旨。あり。て。答。へ。る。曹。操。曰。く。い。ち。る。所。存。ある。賈。翽。曰。く。袁。紹。劉。表。父。子。の。ち。の。ま。り。曹。操。大。に。笑。ひ。卒。よ。ん。と。決。して。五。官。中。郎。を。立。嫡。子。曹。丕。と。て。王。世。子。と。定。む。冬。十。月。魏。王。宮。を。で。成。就。し。け。れ。四。方。の。國。々。へ。人。を。遣。し。て。土。産。の。名。物。菓。木。珍。奇。の。物。を。求。め。させ。吳。の。國。の。福。建。へ。荔枝。龍。眼。の。最。上。を。り。温。呂。へ。柑。子。の。名。物。を。り。と。して。使。を。め。て。吳。の。孫。權。に。柑。子。を。取。て。上。に。

曹操の命  
よつて孫權  
温及の  
柑子と  
贈る



奉行

九徳



よとして魏王の令旨を傳へけり。その時孫権もて貢物を献上  
上と約せしむ。その令旨昔くとも温の太ちる柑子  
とあらび集く。人夫を擔せ四十荷ありて都へ送る。吳の國  
の人夫中途よりして。その疲しき山の傍に荷を下して。さびしく  
休むけるあり。一人の老人片目へ眇みて。一方の足跛たるが。白き  
藤の冠を青き色の衣を着て。忽然として生來り。礼をせし  
て。やけぬ。汝も亦重荷を負て。疲きたる。我助く取せし  
とて。一人の擔たるを取て。その肩のせき。肩のせき。結て。また  
れといひけり。板下の人夫も亦一度は擔ひ連て。五里をより  
來りける。肩の上。その軽きと物あら。とて。疑ひ怪  
まぐ。とらふものなり。然るの老人奉行む。さびしく。疑ひ怪

をもつち魏王曹操と同郷の友とて。左慈字元放とて。道号曰烏  
角先生とらふものあり。御辺都へ上り。曹操を見。其時。せ  
し。のど。とて。結り。入。袖。て。去。けり。ひく  
て。程。さ。く。鄴都へ上り。孫権温の柑子を。送。れり。といひ。され  
ば。曹操喜び。げ。す。大。ち。る。柑子。くれ。と。て。取。り。て。と  
割。り。た。空。を。殼。を。り。よ。と。内。に。実。あり。一。ひ。は。し。さ。い。い。う。よ  
と。愕。き。怪。し。く。その。ゆ。を。問。ふ。奉。行。む。ち。途。に。て。左。慈。の。あ。り  
たる。由。と。あり。の。ま。ま。と。結。る。曹。操。を。れ。い。ど。疑。ひ。と。ち。る。の。あ。り。あ  
よ。り。報。と。て。曰。く。た。る。今。一。人。の。先。生。と。い。は。ら。左。慈。と。や。り。て。生。來。り  
大。王。に。見。し。と。は。が。ひ。ひ。曹。操。を。あ。ら。は。し。び。入。を。け。し。び。吳。の。國。の。表  
行。さ。し。と。と。途。中。と。く。出。合。た。る。人。の。紛。と。さ。り。ひ。と。や。り。曹





んとちかひで。汝さままで取らざる。左慈が曰く。されぬとぞ。然る易  
 きとやあるとく。筆を拂ぐ。粉壁の上より一幻の竜を画き。袖を  
 つく。さままで拂へ。龍の腹おのびうら開たり。さまあつち。手て腹乃  
 中みへ。竜の肝を搜り。生さる。紅の血ちりまき。依を。やがて是  
 を靴りけ。曹操驚ひで。けり。汝元来袖の中。竜を  
 藏し。来まらる。左慈が曰く。いま天氣をれ。と寒して。  
 草木も枯たり。大王い。ちる。花を求む。人望のま。二  
 花を生さ。曹操が曰く。も。牡丹の花を求む。左慈が  
 曰く。易き。ひ。あ。の。と。く。大なる花瓶を席上。生。水。と。り。心  
 て。喚。び。け。ま。へ。須臾のあひ。ご。二。嬋。娟。なる。双頭の牡丹。忽ち生  
 じ。く。春風。を。翻。る。か。と。怪。ま。る。詔。官。奇。異。の。思。は。ま。相。迎。へ

て。堅て。同。い。と。の。酒。を。飲。け。ま。へ。危。人。又。臈。の。鱈。と。い。ひ。ま。ま  
 たる。左慈が曰く。され程の酒宴。も。あ。ん。ど。松江の鱸。を。取  
 る。臈。の。志。の。へ。さ。る。曹操が曰く。松江の。ま。ま。す。り。千里。を。隔。と  
 り。安んぞ。鱸。を。求。る。と。を。得。ん。左慈が曰く。易。ま。ま。と。あり。  
 る。取。く。ま。ら。せ。ん。と。く。釣。竿。を。取。く。堂。を。下。り。け。ん。庭  
 上。の。う。ら。池。水。湧。出。し。り。ま。あ。つ。ち。釣。竿。を。持。ぐ。須臾。の。あ  
 い。ご。ま。大。ある。鯽。を。得。と。枝。十。疋。ま。及。び。ま。ま。と。取。く。進。め。け。れ  
 の。曹操が曰く。ま。池。の。中。原。す。り。ま。の。魚。を。放。し。置。り。左慈が  
 曰く。大王。ち。の。人。の。詐。を。宜。ま。ぞ。天。の。勢。の。ま。臈。二。の。め  
 り。たる。松江の。鯽。の。臈。四。の。め。り。ま。ま。を。を。め。て。証。扱。と。し。詔  
 人。も。ま。ま。ん。べ。ま。ま。と。さ。り。る。果。し。て。臈。四。の。け。ま。へ。愕。然。と



らざとらふものなり。左慈が白く古より。松江の勢で繪より  
て。いふも。茶井の薑と用ひ。曹操が白く。汝ら。薑と取得や。  
左慈が白く。その。易として。金の分。取らせ。袖の中より。茶  
井の薑と生れ。曹操に。献りけり。曹操。取ら。取ら。取ら。取ら。  
ころ。と。忽ち。金の中。一。卷の書あり。王。孟徳。新書と記した。は。  
開く。と。書。初より。終。至る。まで。一字の。差も。な  
ら。ず。中。大。怒り。叱と。打見。左慈。投。と。す  
る。の。左慈。その。色。と。卓の上。王の。盃。と。取。酒  
と。十分。受。曹操。大王。の。酒。を。飲。千。歳。の  
壽。を。得。と。い。ひ。け。曹操。が。白。く。汝。が。と。飲。ん

左慈も。その。肩の上。王の。簪。と。取。盃の。真中。と。横。ま。り。  
ま。の。半。と。飲。又。曹操。に。献。曹操。も。飲。水。乃  
ど。く。ち。り。と。吐。ら。ん。と。左慈。盃。を。取。空中。に  
擲。と。い。ひ。忽ち。白。鳩。と。変。と。殿中。と。飛。ゆ。り。  
が。満。坐。を。得。ま。い。や。え。る。間。左慈。行。方。を。失。よ  
けり。曹操。近。侍。の。もの。と。や。その。行。末。と。尋。ね。を。け。ま。を。  
た。今。宮。門。を。生。た。り。と。曹操。い。よ。く。怒。り。許。褚。と。い。ふ。  
で。屈。強。の。精。矢。五。百。余。騎。と。投。け。い。と。追。り。け。と。捉。束。ま。と  
と。下。知。す。と。許。褚。と。い。ふ。馬。を。打。棄。城。門。を。生。と。向。こ  
え。れ。左慈。高。き。木。履。を。穿。く。い。と。歩。と。去。許。褚。も  
と。飛。く。電。光。の。ど。く。追。け。と。左慈。た。目。の。前。の。



て追ひてとめしむ。巴追りけく山の麓に到けし。一竹族の羊ありて左慈その内立し。許褚弓と取て矢を放ちけし。左慈忽ち羊とちりて。何と其とも。分後許褚卒に板瓦の羊とて。とぐ打殺し。兵を引くりける。途中一人の童子あり。羊を牧ひ置し。羊とちりて。右に殺し。なるとりて。大に哭く。とたは傍の地上。人の頭一あり。童子とよぶ。ぐやけり。汝羊の死するが哀く。羊の首と尽く。あひめて。死する羊の腔の上。載置し。本のとぐ。生せし取せし童子。さきに従ひ。されは許褚を殺し。弃たり。首とあひめて。羊の腔のせけし。左慈忽然と。踊生する。は従て。板瓦の羊とて。ぐく活返る。童子家を回し。その由を語りけ

れ。家王の夫あり。怪く。やひ曹操を見。許褚を殺し。曹操の女あり。ちあひ。繪図の形を写し。普く左慈を尋ねさせける。三日とせし。ぎぎる。六日の。足波白き。隣の冠。青き色の衣。著たる。老人とて。いふ。違ひ。ら。四五百人とて。来る。曹操のく。の大將。命とて。羊の血とて。ぐ。城の南。軍兵を訓練する。馬場。生て。から。大軍とて。や。十重。重。一人も。残。首を刎ける。と。一道の青気とちり。空中。立上。忽ち。として。一處。取。化し。左慈とちり。ける。招き。白き鶴。打乗。雲の上。飛揚。掌。拍。大に笑ひ。玉。金。虎。奸。雄。一。日。休。と。よ。べ。り。け。れ。バ。

曹操然將を下知く弓鉄炮を打けし忽然と狂  
風吹起り沙を飛り石を走らさざり死  
の屍まのどぐく跳り動き手よその首を提げて  
りり上り曹操は打向ひけし文武の諸將震ひ怖  
魂を失ひ膽を冷して逃走る何れもさく哭き  
さへて須臾のあいだ風定りぬ諸人曹操をな  
よ入さしければさす病を受けていふ治され  
ま

曹操試神卜管輅

曹操重病を受けて太史巫許芝と許昌より  
一めんといひけし許芝が曰く大王世に管輅  
あると云く入るる曹操が曰くは乃その名を  
くひその才の詳あるを詔れ許芝が曰く管輅  
人あり白をぬぎ醜く外威儀を調を酒を好  
たり八九歳のときより天文を視と好で人  
と問夜へ睡らば星辰を考ふ父母を止むれ  
らよ休む常よりける家雞野鵲もあつた  
いふ況や人の世あるや天文をきらるる  
小兒と戯れ遊も沙の上天文を画き日月  
布て指占してさす年長なるみ及んで深  
明や仰て風角を眼よく神に通ずその父曾  
長より管輅年十五歳書を讀む日お千言

あると云く入るる曹操が曰くは乃その名を  
くひその才の詳あるを詔れ許芝が曰く管輅  
人あり白をぬぎ醜く外威儀を調を酒を好  
たり八九歳のときより天文を視と好で人  
と問夜へ睡らば星辰を考ふ父母を止むれ  
らよ休む常よりける家雞野鵲もあつた  
いふ況や人の世あるや天文をきらるる  
小兒と戯れ遊も沙の上天文を画き日月  
布て指占してさす年長なるみ及んで深  
明や仰て風角を眼よく神に通ずその父曾  
長より管輅年十五歳書を讀む日お千言

とも四方の學者とす及工のあつて天下号して神童と稱す。  
 後又居民郭恩といふもの兄弟二人とある壁の疾ありけむを  
 管輅とまねひてトせける。管輅が白くいふトて卦を考ふる。  
 御辺が家本女の墓ありうれらむ御辺が叔母の魂あらん。  
 昔昔飢饉の年うらむ數斗の米を貪り叔母を井の底へ  
 推落しける。嘖こころして言あり。大なる石をあつてその  
 頭を碎き水の底よく痛く苦んで死たり。恨まらる。  
 御辺兄弟天の責を受けその疾あり。郭恩とまねてきいて涙を  
 ちりて地を伏し。昔ぞこころして活るゆゑを為りと懺悔  
 して。叔日のめい。管輅を家よち置ける。あるとや梁の上  
 鳩一羽とび来て。鳴色をれは哀のり。管輅のまを

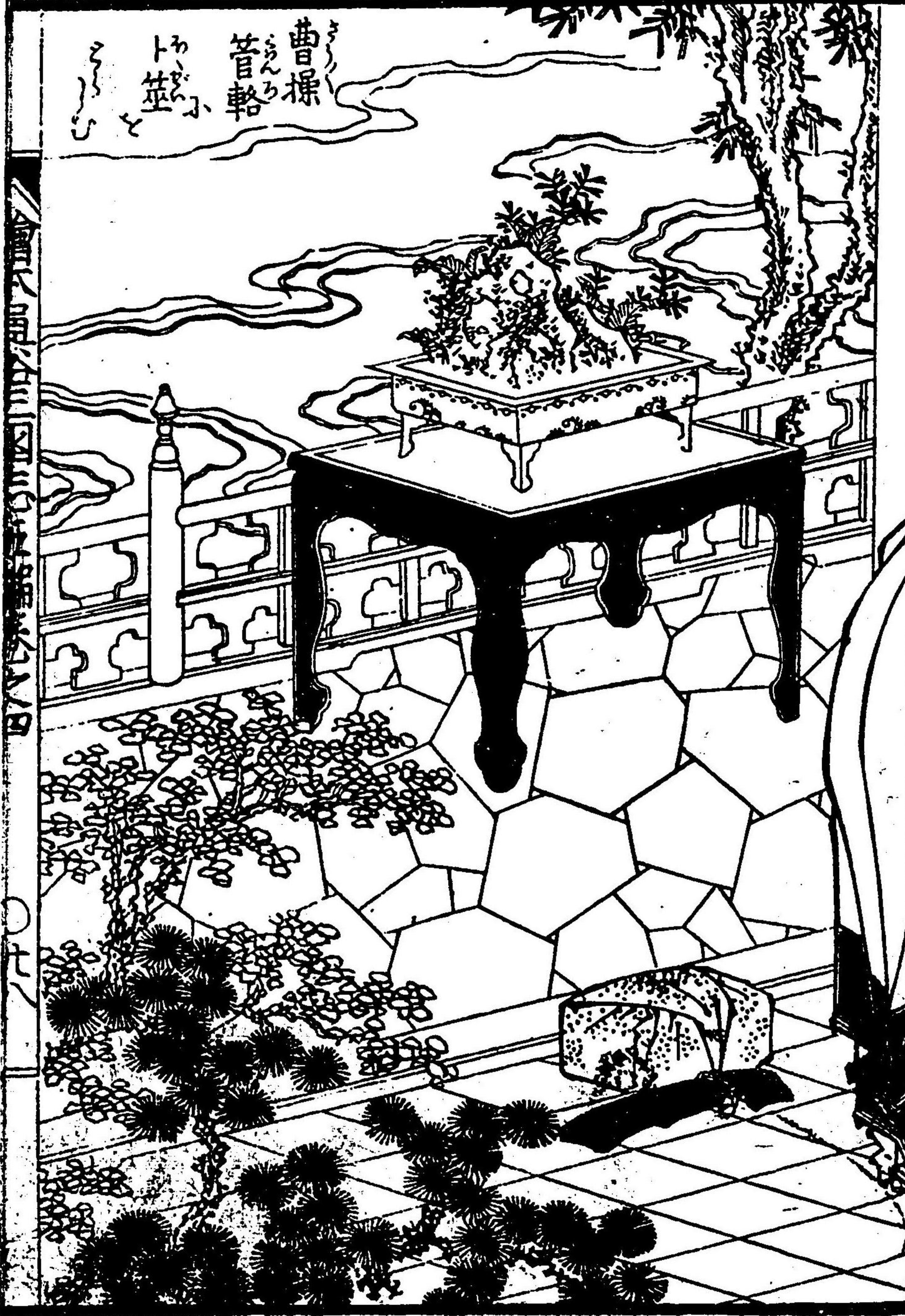
トて曰く。今日午の刻は家主の親も人東の方より猪の肉と濁  
 酒とを推し来り。賓主とも酔ひ笑ひ樂心中みうれとす。  
 まく愕くともらん。その日果して婚姨酒肉を推し来り。郭  
 恩兄弟とたむ。飲で笑ひ飲ふ。郭恩家使奴も命ト。  
 雞を射殺して客をゆてさせと云け。ば奴矢を取と籬の  
 上より雞を射ぬ。あやまひ。鄰家の女中左の肩より血  
 ちりたり。右ふしぎの驗ありける。安平の太守王基これ  
 てもこの家の妻は極頭風を病。その子はねよ心痛と  
 苦む。一家の人時ちりて驚き魔れけむ。管輅  
 と精てト。管輅やけらる。堂の西に死人の屍  
 あり。一人の矛と持一人の弓矢と持。その頭は壁の内よ

りて脚の壁より外にあり。矛を持して頭を刺して主君  
 きの人頭風痛を撃つとあたふたの。弓矢を持して西月を  
 刺して主君の心腹痛を。飲食するところの。書  
 外に浮き遊んで夜に又家へ回る。人々を驚かし  
 むる。太守をこれに怪しむ。堂の西と掘せしむ。地の下八  
 尺を掘りしめて果て二つの棺あり。二つの棺の中は矛あり。又  
 一つは角の弓と木の矢とあり。まは朽爛たりけると骸骨と  
 とも。城外十里あり去る。地中へ埋ちけしむ。家内はまより  
 平安あり。又節陶の令。諸尊原といふもの。あつて新興の  
 太守は迂る管輅とよんで送りけしむ。座客とあ曰く。御辺へ下  
 の名を得とり。秘びて物を藏して。まを問ふ。太守はこれ

ち燕の卵と蜂の窠と鉄珠とを。三つの盒に入し。まよく  
 藏して問せしむ。管輅卦を考へ盒の上へ書付し。曰く。そ  
 の一は含と氣。須変。依于堂宇。雌雄以形羽翼舒張。  
 まは燕の卵あり。その二は家室。倒懸門戸。象多藏精。  
 去月。毒得。秋乃化。まは蜂の窠あり。その三は鼈鯨。長  
 足吐絲。成羅。尋求網求。食利在昏夜。まは蜘蛛あり。  
 満座まはして。まを問ふ。管輅が。牛と  
 失ふ。女あり。来て下と頼し。けしむ。管輅中ける。北漢の  
 西。七十人。まの牛を殺せるものあり。速く行て。皮と肉  
 と。まを問ふ。女行て。果し。茅の舎。七十人の男  
 女の。牛と煮て。食ける。皮と肉と。まを問ふ。残るものあり。まを

女いそぐれ郡の太守劉邠は新けき即時み七人の里で捉  
て罪を糾しその女もあるとてまねとまりたると問ひ管輅  
がトたる由を詰る太守も信ありとせまされつらむせま  
とて裁ん為の印の囊と山雞の毛とを盒の中へ藏してトらせけ  
れは管輅が白く一山の内は外圍五色成文合宮玉守信出  
則有章草まも印の囊あり又一山の巖々有鳥錦体朱衣  
羽翼玄黄鳴不失晨暮山雞の毛あり太守も信あり  
ゆめての外は尊び敬みあつた春の暮は野辺に送て遣送し  
けき二人の美少年田の畔あり管輅道の傍に立ち良人  
く見けるが汝は何人ぞと問へば少年答て曰く趙顔といふ者  
よて年十九歳あり管輅が曰く汝が眉の間は死氣あり三

日の内はあつたも死せんまもへ乃ち管輅あり汝が美く妍を  
見て早死せん」と惜むあり趙顔あへいと敬馬き家へ回  
て父を告げまづその父まう走り来り涙とちかちて地を拜  
哭し福がくちまが子とまくひる人といふ管輅が曰くされ天命  
ありまもいふて救とを得んその父大に哭て曰く老夫たる  
まの子ありり死せばいふまもき福がくち憐れ垂れ入管  
輅もろの内もまも思ひ汝り子の命を救んとあゆまきよ  
き酒一樽と鹿の脯とを持せて明日南山の中へ遣せ大ま  
る樹の下は基盤ありて二人對して碁を打とのあらし一  
人の南むむで堅し白き衣を着てその白き衣を着て聽し又  
北む向て堅し紅の衣を着て負をれど美しとれち二人



三國志卷之四十九  
九十七

酒と肉とをとりて。その尽るまで。哭いて命の短さを告ぐ。れ  
ら。毒と増し。相構へ。教とる。と。已とあられ。ひけ  
ま。その父喜んで。管輅と家にとち置は。その日趙顔は酒  
と肉とを持せ。南山の中へ赴く。已と入と。五六里。で  
果して茂る。樹の下。石の盤あり。二人南北に對して。基と  
田と。全く傍と。顧と。さ。り。趙顔と。ひ。つ。つ。と。ま。ま  
ひ。跪いて。酒と肉とを。進る。二人とも。基と。田と。ひ。つ。つ。と。ま。ま  
不覺酒をの。と。尽せり。趙顔哭て。地を。拝し。ほ。つ。つ。と。ま。ま  
命と。救ひ。の。人。と。云。け。ま。二人とも。大。に。愕。く。紅。の。衣。と。着。せ  
る。人。を。け。る。ま。ま。う。れ。ま。ま。管輅が。所。為。ち。ら。ん。ま。ま。二人とも。で  
よ。私。の。施。と。受。ち。ま。ま。と。隣。ま。ま。ん。を。叶。ま。ま。白。き。衣。と。着。なる

人。棟。の中。より。簿。と。とり。坐。し。考。見。て。や。け。る。ま。ま。汝。今。年。十。九  
歳。あり。ま。ま。の。十。の。字。の上。よ。又。一。の。九。の。字。を。添。へ。汝。れ  
ら。ま。ま。九。十。九。年。の。壽。と。保。み。ま。ま。汝。回。く。管輅。ま。ま。ん。を。再  
び。天。棧。を。泄。さ。し。ま。ま。の。ま。ま。の。大。なる。罪。あり。ま。ま。と。や。せ。と  
ひ。み。て。紅。の。衣。と。着。なる。人。筆。と。取。て。簿。ま。ま。九。の。字。と。添。け。る  
が。俄。に。異。香。風。ま。ま。ひ。る。ま。ま。の。二。の。白。き。鶴。と。化。して。天。よ。上。り。失  
ま。け。り。趙。顔。家。へ。回。て。右。の。由。と。告。げ。ま。ま。管輅。が。曰。く。紅。の  
衣。と。着。なる。南。斗。あり。白。き。衣。と。着。なる。北。斗。あり。趙  
顔。問。て。曰。く。ま。ま。北。斗。の。星。の。ま。ま。の。板。九。の。あり。と。ま。ま。の。ま  
ま。の。二人。ある。管輅。が。曰。く。散。じて。九。の。と。あり。合。して。一。の。と  
ある。北。斗。の。人間。の。死。せ。る。と。記。し。南。斗。の。生。と。註。と。い。ま。簿。を

九の字を添う。汝あるの憂あるといひけ。父子喜を  
再拜す。管輅あるより。天機を泄すといふと。怖る。その  
人のたぢよ。ト。も。の。予。も。あ。る。の。よ。て。今。平。原。郡。の  
あ。の。天。王。の。ま。を。や。して。問。人。と。結。り。け。ま。の。曹。操。大。に。喜。び。  
そ。の。使。と。ま。せ。て。招。き。よ。せ。左。慈。と。て。倍。に。占。せ。け。ま。の。管。輅。を。て  
曰。く。ま。れ。ま。幻。術。と。て。奇。妙。と。ま。さ。る。た。ら。ま。あ。の。患。る。の  
も。も。曹。操。の。ま。を。ま。り。て。即。時。の。衆。氣。の。ひ。く。る。心。地。に  
れ。バ。又。天。の。の。と。ト。一。ひ。る。の。管。輅。が。曰。く。三。八。縦。横。黃  
猪。遇。虎。定。軍。之。南。傷。折。一。股。又。算。數。を。ト。て。曰。く。獅。子  
宮。中。以。安。神。位。王。道。昌。新。子。孫。極。貴。曹。操。が。曰。く。孫。が  
へ。へ。又。詳。に。ま。さ。る。の。管。輅。が。曰。く。廿。七。々。々。たる。天。數。あ。ら。う。と。あ

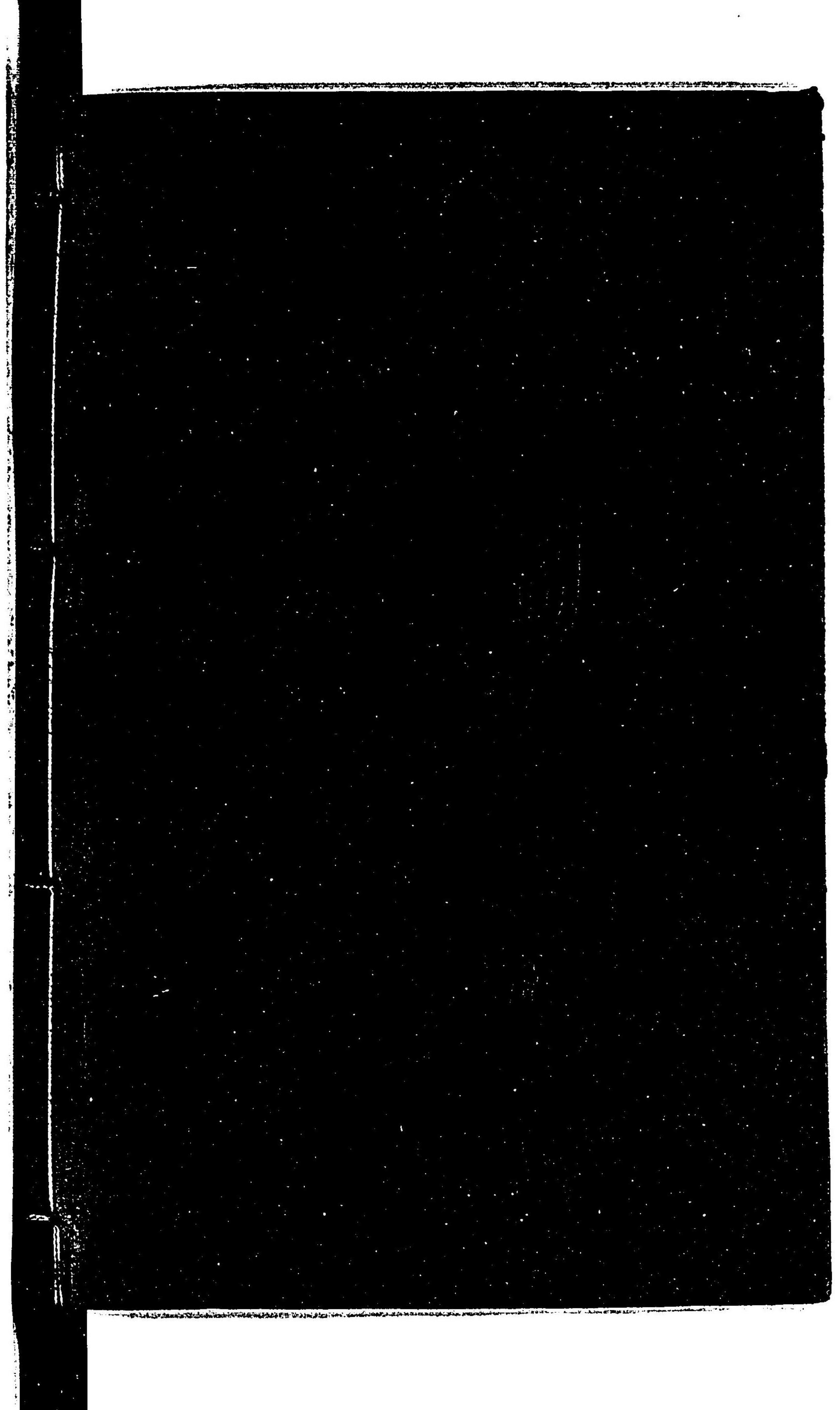
あ。る。の。後。の。應。驗。あ。ら。う。方。に。悟。ま。る。曹。操。又。雲。の。龍。に。從  
ひ。風。の。虎。に。從。ふ。の。意。を。論。じ。て。曰。く。龍。動。と。れ。の。景。雲。起。り。虎  
嘯。と。れ。の。谷。風。生。じ。と。ま。火。星。の。龍。參。星。の。虎。あ。る。所。以。に  
て。火。出。る。と。れ。の。雲。應。じ。參。星。と。れ。の。風。至。る。と。ま。ま。を。れ。ら  
陰。陽。の。感。化。を。龍。虎。の。致。せ。る。あ。ら。う。と。管。輅。が。曰。く。夫  
事。を。論。じ。る。の。宜。く。その。本。を。詳。し。て。而。て。右。の。の。理。を  
求。む。べ。し。理。違。と。れ。の。機。を。あ。ら。ぬ。機。を。あ。ら。ぬ。と。れ。の。米。厚。ま  
ま。と。ま。る。の。參。星。と。れ。の。虎。と。ま。る。と。れ。の。谷。風。と。ま。る。寒  
霜。の。風。と。ま。る。東。風。の。名。の。无。る。と。ま。の。人。の。龍。の。陽。の。精。を  
て。替。へ。り。て。陰。と。ん。幽。靈。上。に。通。じ。和。氣。神。を。感。じ。て。二。物  
相。扶。く。の。人。よ。く。雲。を。起。ま。と。と。得。ぞ。れ。虎。の。陰。の。精。を。陽





の國こくも二人の大將たいしやうと失うしなへり。蜀しやくの國こくより兵へいと起おこして界かいりて北きた
  
 へ入いり。曹操そうそういざと信まこととせざるをみ忽いっこにち合あひひの城じやうより早馬はやま来き
  
 り。吳ごの陸りく口こうと守まもる大將たいしやう魯肅ろそく病やまひを受けて死したりと報あやせ
   
 る。愕おどろき即時そくじ二人を漢中かんちゆうへ遣つかして消息しよきとききしむる。又また報あやせ
   
 る。早馬はやま来きり。蜀しやくの玄徳げんたくよく國中こくちゆうで平定へいていし。張飛ちやうへい馬超ましやうと大將たいしやうと
   
 て大おほ勢せいと下くだ奔ほんみさしむけ。漢中かんちゆうへ攻せめると告つげま。曹操そうそう大たい怒ど
  
 兵へいと起おこして蜀しやくを伐はくと義ぎしけま。管輅くわんらくさへてトて曰いわく大王たいわうの
   
 ど。うろく。都みやこを離はなすの一人ひとりと勿なれ来春らいしゆん都みやこの内うちよりれま。火ひの災わざわ
   
 ろん。曹操そうそうさへて交まじりて。管輅くわんらくが親おんしく驗しるめるとやめて。蜀しやくは向むかふと差さ
  
 へた。その身みは鄴郡げつぐんに止とどり居ゐり。曹洪そうかう五万ごまんの勢せいと授まかせ早く漢中かんちゆうへ行いり。夏侯しやうはう
  
 張ちやう郃がとと入いり。要よう塞さいと守まもりて。蜀しやくの敵てきと拒かげしむ。繪本通俗三國志五續卷之四終

122  
74  
28



12  
174  
28

繪本通俗三國志

五編

田

三國志  
卷之五  
田